



調宮(つきのみや)の名前で愛されている調神社

「月読尊…」
「古事記ではあんまり活躍してはりまへんけど、尊い神だす。月読神社は(中略)、関東は武蔵国北足立郡岸村にあります。もっとも岸村のは調神社になつとりますが、これも祭神は月読尊やと思つてます。岸村というのは、現在の浦和市だす。埼玉県庁のあるところだす」
さすがに宮司だけに全国の神社を暗記しているようだった。とくに調神社は今の浦和市にあると云われて、吉屋は足もとを指された気がした。
(松本清張「神々の乱心」下より、p.179)

わがまち はっけん Sai 発

さいたま市 de ミステリー

さいたま市が舞台の推理小説

千篇にのぼる作品を残した松本清張の未完の遺作「神々の乱心」(文藝春秋、1997)は、昭和史の闇を描いた推理小説です。新興宗教と古代史の複合した連続殺人事件に埼玉県特高課第一係長と子爵家の次男が翻弄される内容で、調神社などが登場します。他にも清張の「草の陰刻」(講談社、1965)には、大宮郵便局の消印が押された官製葉書と高崎線が登場します。清張以外にも、現在活躍中の作家の推理小説には、さいたま市の多くの場所が登場しています。その一部をご紹介します。

ロイヤルトレイン * * 寝台特急「北斗星」殺人事件

西村京太郎著 光文社、1998

新幹線やブルートレインが停車する大宮駅は時刻表ミステリーの経由地点としてはよく登場しますが、トリックの鍵を握る重要な舞台として登場するのがこの「寝台特急「北斗星」殺人事件」です。踊り子号が爆破され、青函トンネルを走る北斗星5号にも爆破予告が。仕掛けられた爆弾の謎を追って警視庁捜査一課十津川省三がJR大宮工場へ跳ぶ。この作品の第9章のサブタイトルは「大宮工場」。鉄道博物館オープン前の姿が仔細に描かれています。

鳥取難送り殺人事件

内田康夫著 中央公論社、1991

十津川警部とならんで人気が高いのが、内田康夫の旅情ミステリーに登場する名探偵浅見光彦です。

この「鳥取難送り殺人事件」では、新宿の花園神社で撲殺された難人形師の死体を光彦が発見、袂の謎を解く手掛かりを求めて岩槻市役所や人形記念館を取材してまわります。光彦は鳥取に捜査に行き、その長期不在中に事件が起きるのが、「浅

う名の残酷ないじめ。20年後の同窓会にあわせて進行される大量殺人計画。担任教師が浦和市内の私立女子高校で教員をしていることから、浦和駅西口、与野駅みどりの窓口、武蔵浦和駅などが登場します。日本推理作家協会賞(長編部門)受賞作品。

長い腕

川崎草志著 角川書店、2001

上尾市に住み、さいたま新都心にあるゲーム制作会社に勤務している島汐路は、同僚の転落死を目撃。故郷で起きた女子中学生射殺事件と同僚の死の関連に気づいて調査を始める汐路は「浦和東図書館」を利用しています。図書館が好きなのは「昔風の図書館の雰囲気味わいたい時には県立図書館に行く」、落ち着きたい時は浦和中央図書館を利用(086)していて、閉館間際の図書館の様子ガリガリに描写されています。横溝正史「ミステリ大賞受賞作品」。

天使のナイフ

栗丸岳著 講談社、2005

榎山高志はシングルファーザーで、氷川参道近くにあるカフェの店長。17歳の定時制高校生が大宮公園で殺害され、榎山は容疑者にされてしまう。被害者は元少年B。4年前に、娘の目の前で妻を殺した犯人の一人だ。彼ら犯人は当時13歳であったがために「殺人事件」が「非行」と置き換えられ、謝罪の言葉も懺悔の涙も刑を受けることもなく「更生」という言葉で片付けられてしまっていた。物語の冒頭で、蓮田駅から大宮駅に向かう宇都宮線よりの車内風景から榎山の心情が描写されていきます。大宮周辺を舞台に罪と贖罪の意味を問う社会派ミステリーです。江戸川乱歩賞受賞作品。

見光彦殺人事件」(角川書店、1991)です。北原白秋の詩集の謎に挑む光彦。ヒロイン寺沢詩織の伯父伯母が浦和に住んでいます。

光彦が犬乗り童子の謎に挑む「朝日殺人事件」(実業之日本社、1992)のラストシーンでは、密室殺人事件の犯人が、大宮市内のマンションに住んでいることがわかります。

諏訪湖マジック

一階堂黎人著 徳間書店、1999

JR大宮駅北側の陸橋から高崎線めがけて投げ落とされて、上り列車に跳ね飛ばされた男性の死体。実は2ヶ月前には、同じ場所で同じ時刻に同じ列車に主婦の投身自殺があった。旅行社に勤める水乃サトルは、元同僚の女性から失踪中の父親の捜索を依頼されるのだが、大宮駅の轢死体が彼女の父親だった。武田信玄の墓が湖底にあるという伝説が絡んで、事件の舞台は諏訪市に移ってゆきます。

広域指定127号事件

鳥羽亮著 講談社、1994

岩槻市の元荒川河川敷、墨田区、那須町の三ヶ所と同時に自動車が発見された。警視庁捜査一課南部平蔵以下7人の刑事は、わずかな手掛かりと足で稼いだ情報を頼りに真相に迫る。次第に被害者3人の接点が明らかになるが、警察の持つ捜査力を逆に利用した犯人の巧妙な罠が仕掛けられていた。警視庁捜査一課南平班シリーズの2作目。

沈黙の教室

折原一著 早川書房、1994

青葉ヶ丘中学3年A組で行われていた肅清とい

奇跡の人

真保裕一著 角川書店、1997

交通事故で記憶を失った相馬克己は社会復帰を機会に過去の自分探しを始めるが、かつて愛した女性と浦和市元町3丁目に住んでいることを知る。県立近代美術館や北浦和公園など実在する場所がほかほかながらも描かれています。

発火点

真保裕一著 講談社、2002

12歳の夏に父を殺された過去を持つ21歳の主人公が、失った9年間と父の死の真相を求める物語。杉本敦也の本籍は大宮市天沼町5丁目。再び故郷を訪れる敦也が大宮駅で電車を降りて母の実家を訪ねます。太宰治の「斜陽」がキーワードの一つになり、「走れメロス」を図書館で借りるシーンもあります。

この作品の文庫版あとがきで作者は、物語の舞台の選定について「物語の雰囲気を作る際、街は重要な役割を果たす」と記しています。

誘拐ラプソディー

萩原浩著 双葉社、2001

さいたま市の旧4市全域をまたにかけた誘拐劇で、埼玉県警察、広域指定暴力団、外国人マフィアが伊達秀吉に迫ります。

作者は冒頭に「地図から消えてしまった我が故郷(大宮市)」と記しています。秀吉が、田園地帯と住宅街が混在する先にあるスーパーアーリーナを眺めて「一面のレンゲ田の向こうに、ミニユメントのような高層ビル群と円形ドーム風の建物が見える」(082)とつぶやくシーンがあります。七里をナナリと読み間違えたりするところも、20年以上大宮に住んだ作者の郷土愛の表れとも思えます。

たいして作業が進まない内に図書館の閉館を知らせるアナウンスが始まった。あわてて、汐路は図書館備え付けの有料コピー機に向かう。(中略)かなりの時間がたち、汐路以外の利用者は、いなくなった。エプロンをした女性の図書館職員がちらちらと汐路の方を見始めた。その図書館職員が汐路に注意しようと席を立ったとき、やっとコピーが完了した。
(川崎草志「長い腕」より、p.87)



閉鎖間際の東浦和図書館



大宮工場は、現在大宮総合車両センターの名称に。

大宮工場は、JR大宮駅の近くというより、駅につながった形で工場の敷地が広がっていた。高さ二メートルほどの白い壁に沿って、車を走らせると正門に着いた。二人は車を降りて、守衛所に行き、警察手帳を見せて、責任者に会いたい旨を告げた。
(西村京太郎「寝台特急「北斗星」殺人事件」より、p.193)